



日本記者クラブ  
囲む会

## 詩人の目に映る復興、風景、故郷

長田 弘 詩人

2014年2月19日

10カ月前に「福島出身の詩人が語る 3.11」と題して当クラブで話していただいた。今回は詩集『奇跡—ミラクル—』が毎日芸術賞を受けたことを記念して、震災後3年の復興などについて、詩人の目にはどう映っているのか、ゆっくりと語ってもらうことにした。詩人・木下杢太郎と永代橋のこと、3.11の直後に春を迎える被災地のこと……。前回に続いて、長田さんの話は何かとせわしないプレスセンターに、ゆったりとした時間を流してくれる。「詩人は金にはなりません。感受性の畑を耕すのが仕事」という言葉が印象深かった。

司会：星浩 日本記者クラブ企画委員（朝日新聞特別編集委員）

日本記者クラブ Youtube チャンネル

[http://www.youtube.com/watch?v=IWQDpXABsRs&list=UU\\_iMvY293APrYBxOCJReIVw](http://www.youtube.com/watch?v=IWQDpXABsRs&list=UU_iMvY293APrYBxOCJReIVw)

©公益社団法人 日本記者クラブ

司会:星浩・企画委員(朝日新聞特別編集委員)

詩人の長田弘さんでございます。先ごろ詩集『奇跡ーミラクルー』という本で毎日芸術賞を受賞されました。きょうは、この詩集の話を含めてお話を伺いたいと思います。

ご存じのように、長田さんは福島市出身の詩人でございます。今回も震災、原発事故などについての詩も幾つかお書きになっておりますので、そのあたりを中心にお話を伺って、あとは皆さんを交えて談話会のような形で進めてまいりたいと思います。私は当クラブの企画委員、朝日新聞の星でございます。

それでは、長田さん、よろしく願いいたします。

### 木下柰太郎と永代橋

長田弘・詩人 わたしは、風景というものを生きる、あるいは風景の語っている言葉でない言葉というものを書き取るということ、ずっと詩の仕事としてきたものです。

そういうものとして、最近の新聞で読んで引っかけたことがあります。いま開かれている国会の冒頭で行われた首相の施政方針演説が新聞に載っていて、引っかけたのは施政方針演説の中の次のような一節でした。最初にそれを読んでみます。

「力強いアーチ姿の永代橋、関東大震災から3年後、海外の最新工法を取り入れて建設されました。コストがかさむなどの反対を押し切って導入された、当時最先端の技術は、その後全国に広まり、日本の橋梁技術を大きく発展させました。間もなく3度目の3月11日を迎えます。復興は新たなものを創り出し、新たな可能性に挑戦するチャンスでもあります。日本ならできるはず、その確固たる自信を持って、新たな創造と可能性の地としての東北を、皆さん、共に創り上げようではありませんか」。

ということが、施政方針の中で高らかに語られています。興味を引かれたのは「永代橋」という言葉です。永代橋というのは隅田川にかかる橋ですが、いまから2年ほど前、大学の友人たちと水上バスで、隅田川の橋めぐりをしました。それで、永代橋というのを、前から非常に好きな橋でしたが、水上から見て、あらためて美しい橋だなと思いました。けれども、よく考えてみると、この永代橋というのは、いろいろと興味深い歴史を黙って伝えてきた橋なのです。

興味深い歴史を黙って伝えてきたというのは、いま隅田川にかかっている橋というのは、一つ明治時代に建てられたものを除いて、ほとんど全てが関東大震災の後につくられた新しい橋なのです。つまり、震災がなかったらできなかった橋である。その最も代表的な橋が、なかでも最も美しいと言われる永代橋です。

この永代橋が、この演説に語られるように、そのときの一番新しい技術で築かれた。そのことがいまに想起されなければならないというのですが、実は、こうした言挙げのうちに語られていない、もっと重要なことがあるということをお話ししたいのです。

隅田川をずうっと河口のほうにたどっていると、千住大橋、白髭橋、言問橋、吾妻橋、駒形橋、厩橋、蔵前橋、両国橋、新大橋、清洲橋、永代橋、相生橋、勝鬨橋、こういう橋が次々にあらわれます。この中で、新しいという字がついている新大橋(これだけが明治につくられたものですが)を除いては、いずれも全部関東大震災後につくられた。言いかえれば、大震災の後に、復興のためにつくられた橋です。

それがいま現在持っている意味というのは、果たして、「当時最先端の技術で日本の橋梁技術を大きく発展させた」という結果だけを生んだのかどうか、ということを考えさせられるのです。

永代橋について、お手元にあると思いますが、非常に興味深い詩を書き残した詩人がいます。それは木下柰太郎という詩人です。詩のタイトルからして「永代橋工事」というタイトルなのです。それを読んでみます。これが書かれたのは1926年、大正15年のことです。つまり大正の終わりです。

過ぎし日の永代の木橋は、  
まだ少年であったわたくしに、  
ああ、どれほどの感激を與へたらう。  
人生は悲しい。  
またなつかしい、面白いと、  
親兄弟には隠した  
酒あとのすずろ心で、  
傳奇的な江戸の幻想に足許危く  
眺めもし、佇みもした。  
それを、ああ、あの大地震、  
いたましい諦念、

歸らぬ愚痴。  
それから前頭の白髪を気にしながら  
橋に近い旗亭の窓から  
あの轟轟たる新橋建設の工事を  
うち眺め、考へた。  
これも仕方がない、  
時勢は移る。  
基礎はなるべく近世的科學的にして、  
建築様式には出来るだけ古典的な  
莊重の趣味を取り入れて造つて貰ひたい。  
などと空想して得心した。

それなのに、同じ工事を見ながら、  
今は希望もなく、感激もなく  
うはの空にあの轟轟たる響を聴き、  
ゆくりなくもさんさん涙ながれる。

あんなに好きであつた東京、  
そして漫漫たる隅田のながれ。  
人生は悲しい  
ここは三界の火宅だと  
——ああ恐ろしい遺傳——  
多分江戸の時代に  
この橋の上で誰かが考へたに相違ない、  
それと同じ心持が今のわたくしに湧く。

水はとこしへに動き、  
橋もまた百年の齡を重ねるだらう。  
わたくしの今のこの心持は  
ただ水の面にうつる雲の影だ。

行く水におくれて淀む花の屑

そして、その後ろに小さくこう記されています。

「永代の新橋は亡兄の心血を濺ぎ設計せるものにてありけるなり。」

つまり、永代橋というのは、この木下柰太郎のお兄さんの設計によるものなのです。このお兄さんというのは、木下柰太郎は本名が太田正雄というのですが、太田圓三という人で、後藤新平のもとで復興の現場に在った人なのです。

大震災以前、すなわち復興以前には丹那トンネルの工事や清水トンネルなどでその頭角をあらわして、後藤新平によって起用されて、復興局の土木局長になりました。そして、東京の復興の計画を推し進めた人なのです。

### 大切にされた美観

その第一は、道路の拡張、新設というようなことを一気にやった。その代表的なものは、皆さん、いまでも東京の道の動脈である昭和通り、あるいは靖国通りというのはこの人の設計のもとでつくられました。

そして第二が、隅田川の橋の建設です。

三番目には、これからの時代は、まだ馬車の時代であった時代に、車の時代が来ると言い、高速道路と地下鉄を計画しています。地下鉄は容れられませんでした。その案は残っているそうです。

なかでも二番目の、隅田川の橋をつくったことが一番後世の記憶に残る仕事として、今日まで残っていますが、その隅田川の橋脚工事というのは、単なる新しい技術で全てをつくったということよりも、一番重要とされたのが、復興に当たって、その橋を、それも幾つもの橋をつくるに当たって一番大切にされたのは、「美観」ということだった、と言われます。つまり、美しい眺めをもつ街にすること。風景を生きる、あるいは風景を生かす思想というものが復興の中心にならなければいけないという考え方で、この人はつくった。

ですから、いろんな意味で、いまの東京の基礎をつくった、あるいは東京のまちづくりの基礎をつくった人、と言えるかもしれません。

でも、それで終わりにはならなかったのです。それで、太田圓三さんは、木下柰太郎のお兄さんはどうなったかということ、大規模な土木工事につきものの疑獄事件というものが起きて、それに巻き込まれ、現場を統括するものとしてというか、自身はそういうこととは縁遠い人だったにもかかわらず、さんざんに疲れてしまい、その結果、愛用していたドイツ製のナイフでもって、夜、自分のベッドで自分で心臓を突き刺して自殺しました。それが1926年の3月21日で、その12月に大正という時代は終わり、昭和という時代が始まるわけです。

ですから、木下柰太郎のお兄さんの死は、大正の終わりを象徴する死だったことにもなります。

しかも、不思議な暗合というか、木下杢太郎のほうは弟ですが、この人が死んだのは 1945 年秋。昭和の戦争の時代が敗戦によって終わった日からほぼ 2 カ月後に亡くなっています。兄弟して、それぞれに日本の近代の一つの時代の終わり、それもどちらも廃墟の後の、この国が復興というものにかかわる時点のところで死んでいった兄弟です。

詩人の記念館は、その兄の記念碑のある兄弟の出身の静岡県の伊東市につくられています。お兄さんは何の遺言も残さず死んだのですが、隅田川の工事だけは何とかして完成して死にたいと、そう望んでいたと言われます。そうして完成した橋が今日残っているわけです。いま永代橋を通る人は、ほとんどそういう人のことなど思い出すことはないかもしれませんが、今日の隅田川の橋というのは、パリのセーヌ川の橋やフィレンツェのアルノ川の橋、そういう橋に匹敵するものをつくりたいという大きな野心を持ってつくられたということ。それは、ただの工事のための工事というのではなくて、先ほど言ったように、復興の中核に置かれたものは、風景を生かす、街を活かす、美観を日常にもたらし、そういう橋をつくることだった。

いま、それから 100 年になんなんとする現在、東日本大震災の後の復興の計画の中でほとんど聞かれないのは、わたしたちが生きていくうえで新たな風景を日常に美観としてつくって、後世に残してゆくという、そういう方向性というものほとんど論じられることはありません。防災という名で語られているのは、風景のことなんてそっちのけにした目先の論議ばかりです。

どうしてそういうことになったのかは疑問ですが、いま永代橋はどうなっているかという、それは国の重要文化財になっています。復興で建てられたものが、そのまま 100 年経って、いみじくも木下杢太郎のこの詩のように、100 年の齢(よわい)を重ねたら、それがわれわれの文化になった。つまり、復興というものを考えたり、そういうときに、なぜ文化ということが重んじられたりすることがないのか。あるいはそっちのけで、それが新しい技術の開発や、それだけで行われるということでもいいのかどうかということを、永代橋その他の橋は教えてください。

勝鬨橋も、もう跳ね上がることはなくなりました。跳ね上がるものがなくなったのは、東京オリンピックのときです。橋が跳ね上がる最後

の日に、わたしはそれを見にゆきました。また、当時の東京の市中の川も埋められて、高速道路になってしまいました。わたしはたまたまその直前に大学生を送った人間ですが、日本橋の上に街の風景に蓋するように高速道路がつくられて、日本橋という橋に備わっていた美観が完全に壊されてしまったことを非常に残念に思っています。2020 年にふたたび東京でオリンピックをやるということであれば、少なくとも 50 年前のオリンピックで壊してしまった、とりわけいまでも日本の道路元標のある日本橋の風景を取り戻してほしいというのが一番の希望ですが、かなえられるかどうかわかりません。

でも、風景を壊すということで発展してきたというのは、この国の近代がずっとやってきたことです。たださまざまな災害の後にも、あるいは逆に、極端なバブル経済のさなかにあっても、そこに何とかして、わたしたちが誇るべき、あるいは愛すべき、懐かしさを残してゆけるような風景の再生を新たにつくりだそうとすることがまったく行われなかったのではないということをおぼろげに思わせてくれるのも、隅田川の橋です。

### 消えた「白砂青松」

風景について言えば、いま、東日本大震災の後、死んでしまった言葉というのがあります。どういう言葉かという、わたしなどが子どものころに教わった、この国の最も美しい風景を言う言葉の一つは「白砂青松」という言葉でした。いま海岸について語られるとき、特に大津波に襲われた東日本の海岸について語られるとき、白砂青松という風景の思想が大切なものとして語られるということはほとんどありません。廃墟の上に松を植えようという運動こそ起きていますが、残念ながら、政治の側から、あるいは経済の側から、白砂青松という風景の思想が大切なんだというような問題提起が行われることはめったにありません。

復興というものの中に、美しいという思想を持つものが、風景の美しさというものをわたしたちのものにして取り返していかなければいけないということが復興の幹になってゆくのではなければならないだろうと、自分はよく考えます。というのは、自分は自分を育ててくれた風景のなかで育ってきたというふうに、いつも思うからです。

木下杢太郎は、「永代橋工事」という先ほどの詩を書く1年前に、こういう詩を書いています。この詩がむしろいま逆に身にしみるようになるというのは非常に残念なことです。それはお配りした資料の上の段にある「諷詩」という詩です。

電気、瓦斯、飛行機、  
凡ての現代文明は直路坦として戦争に向ふ。  
他民族を殺す努力、  
必然にはあらざれども自然の勢なり。

進歩、能率はその合言葉、

かの島國の小さき人人は  
凡てのHUMANITES（ゆまにて）を離れつつあり。

（HUMANITESとは畢竟是れ「ことば」なり。「ことば」の負う精霊の果實なり。）

蒼茫極みなき古き國、支那。  
その聖賢によりて彼の倭人等も  
始めて人らしくなりつるなり。  
今や牛を馬に乗りかへむとて  
英語、獨逸語をその言葉に飾る。  
無論希臘羅甸の巨匠の  
思想を傳ふる響なんぞ知りはせで。

今倉皇として隣強の勢威に恐れ、  
（「現代の匈奴」は東洋を壓す、）  
それに倣ひて造り得たり、七階の猿の高櫻。  
帝都のまん中にわるじやれな某ホテル。

（獨創は典雅を顧みずと曰ふか？）  
言ふらくは能率、進歩及び文化。  
文化鍋、文化住宅文化蠅取器。  
かの島人の相醜く貌いやしけれども、  
ゆめ之を軽んずることなかれ。  
少なくとも時勢に遅れぬ  
才智をば彼等は持てり。  
うっかりすると  
どてつ腹を突かれるぞ。

という捨てぜりふのようなことで終わって

います。詩「永代橋工事」と詩「諷詩」をともに収める『木下杢太郎詩集』が出たのは昭和五年、1930年。その2年後に、首相官邸に押し入った陸軍士官学校生らによる5・15事件が起き、問答無用と「どてつ腹を突かれて」時の首相が射殺され、それを機に日本は、戦争の時代へ大きく変わっていくわけです。「諷詩」のように、「凡ての現代文明は直路坦として戦争に向ふ」という、そういう時代にこの国は移っていくわけです。現代文明の「直路坦として向かう」先が案じられるのは、今も昔と変わりありません。

木下杢太郎は人文主義の詩人です。「ことば」の負う精霊の果實としてのヒューマニティーを重んじた詩人でした。この人の本名の仕事は、東京帝大の教授で、皮膚科が専門で、水虫の原因が何であるかということ初めて日本で特定した人としても知られ、晩年となる昭和10年代は、飢饉に襲われた東北で調査に当たり、またずっとハンセン病の回復にはどういうふうにしたらいいかということをやっている、60歳で亡くなった。実際、医師として具体的な非常に業績ある仕事を続けた人だったようです。と同時に、小唄端唄に長じ、南蛮に通じ、知友に恵まれた人でもあった、

詩人としては、与謝野鉄幹、与謝野晶子のもとに、そして森鷗外に多くを学んで、北原白秋と親しく、高村光太郎と親しく、江戸の文化に通じ、あらゆる国の言葉——あらゆる国の言葉というのはちょっと大げさですが——何カ国語にも通じて、世界を一周して見事な紀行文も残したような人でした。

### 歴史を負った永代橋

そういう時代にあつてのいわば人文思想のかたちとして残されてあるというのが、実はその隅田川の永代橋——永代というのは永久の永、その代続くという、そういう橋の名前であることは象徴的ですが、そういうような橋であつて、しかし、その橋をいま見ることができるわたしたちに、そういう歴史を見すえてきた橋であるということは、ほとんど知られないけれども、そういう歴史を負って日本の近代の風景というのはつくられたことを、あの橋はよくあらわしているように思います。

特に東京は、もともとは水の都でしたから、橋の思想というのはとても重要です。いろいろな橋を見ると、それがよくわかります。いまそ

ういうところから、いわば「美しい町」の風景とは何かを考えた、あるいはそういう風景を残そう、何としてでも復興というものはわたしたちがそこに懐かしさを覚える新しいものでなければならぬ、というような、大きな考え方に「心血を濺ぎ設計せられた」ものだったということは、いま思い出されて十分ではないかと思えます。

関東大震災後の復興の問題で、後藤新平の果たした業績というものは随分顧みられるようになりましたが、それを支えたうちの一人が、この木下杢太郎の自殺したお兄さんだったこと。しかし、結局、そういう人の足を引っ張ってしまったものというのは、とかくして土木工事というものには必ずつきまとう、きわめて世俗的な疑獄事件だったこと。

そういえば、この「疑獄」という言葉はあまり聞かなくなりました。でも、いま現在でも毎日の新聞を見る限りにおいては、いろいろ進まない土木工事や、うまくいかないいろいろなものというのは、相変わらずそういうようなもので足を引っ張られているところはやっぱりたくさんあるのかもしれない。

だけれども、そこでもっとずっと考えられなければいけないのは、われわれの持つ風景とは何だろうか、懐かしい風景をつくりだすものは何だろうかという問いかけではないか、というふうに思うのです。詩を書いてきた人間として言えば、そういうことが非常に大きいです。

この間、たまたま大雪の日に、あろうことか長野県の松本にいました。雪がたくさん降ったため、高い山々は全然見えず、麓の山しか見えなかったのですが、それだけでも自分が育った福島の山々とは、山並みが全く違います。松本の人たちが「山」という言葉でいう山と、わたしが育ったところの福島でいう山とは、「山」という言葉は同じでも、「山」という観念が全然違うということを痛感しました。

大雪というのはそのときも、さらにその後の始末も恐ろしく大変で、今回も東京に戻るのに5時間を労する結果になりました。移動というよりは、列車が停まっている時間のほうが長かった。でも、そうして戻ってくるのに難儀しながら、同時に大雪の光景というのが懐かしく実感されたということも確かです。

ふだんは忘れていたけれども、やっぱりこのような風景の中に、わたしたちが「くに」とよんできた懐かしい時間があり、場所があるのだ

ということ、今更ながら考えさせられました。国会で施政方針演説をされた首相には『美しい国へ』という著書もありますが、その「国」というのは、国家としての「国」。でも、本当に美しいというべき「くに」というのは、国家としての「国」ではありません。国家というのは、あくまでフィクションにすぎません。わたしたちが盆に、あるいは正月に、自分の「くに」に帰るという「くに」は郷土、故郷、すなわち地方を意味します。その「くに」という言葉が「国」になって、地方がなくなって、親しい風景をもたない、国家としての「国」という抽象的な言葉しかいま残っていないのが「国」という言葉の感覚です。

しかし、この国家としての「国」という言葉ができたのは、明治維新以降、世界的にみても、19世紀の半ば過ぎからこっちにすぎません。国家としての「国」というものと、それぞれがそれぞれの場所で生きてきた風景、懐かしさを誘う風景である地方が自分たちの「くに」であるという考え方というのは、世界全体を考えても、いま地方としての「くに」はどこに、どういうふうになっているか、考えます。

東日本大震災の後で最も歌われた歌というのは「故郷（ふるさと）」という文部省唱歌でした。「故郷」というのは1914年につくられた唱歌です。それは、国家と国家が宣戦布告して戦う新しい戦争である第一次世界大戦が勃発した年の歌でした。「兎追ひしかの山 小鮎釣りしかの川」に始まり、「山はあおき故郷 水は清き故郷」に終わるその唱歌が、ちょうど100年前に新しく国家間の戦争が始まった年につくられ、それが100年後のいまにして最も懐かしく、親しい歌として、戻るべき場所の歌としてなお広く歌われるということ。ちなみに、1914年というのは、高村光太郎の『道程』が、また夏目漱石の『心』が出た年でもあります。そう考えると、それはとくに遠く過ぎ去った時代などではないというべきかもしれません。

### 「くに」と読む「故郷」

「故郷」と書いて「ふるさと」と読むのは、その「故郷」が地方としての「くに」だからです。その「くに」は、先にお話した「白砂青松」やこの唱歌のおしまいの「山紫水明」のイメージをはぐくんだ「くに」であり、そういう故郷としての「くに」のあり方を、それからの時代はむしろ積極的に国威として、また発展として自ら進んで失くしてきたところに、わたしたち

はいま在るのではないか、という疑いにしばしばとらえられます。

ですから、逆に、いろんな意味で国家というものの考え方というのが、本当は問われている。そういう中で考えていく場合に、わたしたちの美しい風景というもの、あるいは懐かしい風景というものをどういうふうに取り戻すかということを考えなければいけないのではないか。そのことがすごく大切なのではないかというふうに思います。

もういまは、どこの国に行っても、どこの土地に行っても、同じ空港の建物ばかり。連日放映されるロシアのソチでの冬のオリンピックでも、メインの競技場の建物の外観は、今後、神宮に建てられるという国立競技場の建物の外観に酷似しています。しかし、黒海にのぞみ、世界自然遺産のカフカス山脈に近い、有数のリゾートとされてきたソチという土地柄などが伝えられることがありません。スポーツの放映はだいたいそうで、ほとんどそれがどこのどういところで行われているかに関心を開かせるということが、ほとんどないのが普通で、風景は欠落しています。

そういう個性をしりぞけての平均化、均質化を文明というふうに呼んでいいものだろうかということはやはり考えざるを得ません。スポーツにしたって、実際は違うでしょう。サッカーであれば、ホームとアウェーというのは厳然としてあって、それが独特の土地柄や人気(じんき)をつくっていて、どこでやるかというのがスポーツの大きなモチーフになっています。取り戻したいとねがうのはそういう風景の生む感覚です。

### 自然は雨水に花を咲かせる

きょうは2月19日です。2月19日というのは、日本の季節の親しい区分けである二十四節気という「雨水(うすい)」に当たります。

最後に、詩集『奇跡-ミラクル-』から、「雨水」の季節を書いた詩「賀茂川の葵橋の上で」を読んで、話の終わりにしたいと思います。

低い山並(やまなみ)のつらなりをつつむ  
淡い空気の色が、遠くから  
やわらいできている。  
二月、雨水の頃、  
京都賀茂川の葵橋を渡っていて、

思わず、立ちどまった。

空の青さはまだない。

風もまだおそろしく冷たい。

足元から冷えがすーっと上ってくる。

けれども、橋の上から見る

北山の、山ぎわの、色感の懐かしさ。

萌黄色が微かに染みだしている

あわいの季節の、灰青色の景色の慕わしさ。

浅く穏やかに流れてゆく

賀茂川の、さやさや、さやさや

途絶えることなくつづいている水の音。

オナガガモが、群れなして、音もなく

飛び立ってはまた、静かに舞い降りてきた。

わたしは希望について考えていた。

そして、醍醐寺からの帰りに、タクシーの

運転手の言ったことばのことを考えた。

梅の開花が遅れとるようやけど、

言うても、梅のことやさかい、

時季がくると、それなりに、

そこそこは、咲きよるけどな。……

希望というのはそういうものだと思う。

めぐりくる季節は何をも裏切らない。

何をも裏切らないのが、希望の本質だ。

めぐりゆく季節が、わたし(たち)の希望だ。

死を忘れるな。時は過ぎゆく。季節はめぐる。

今夜は、団栗橋角の蛸長に、

花菜(菜の花)のおでんを食べにゆく。

今朝、自分の家の裏に1本だけある小さな梅の木を見たら、今年初めて梅の花がいくつか開いていました。ちゃんと、この「雨水」という古くからの季節暦どおりに、その日が来ると自然は、花を開かせます。あ、咲いている、と思わずつぶやいて、非常にうれしくなりました。こういう風景というものがわれわれを支えているんだということを考えます。

梅の花が咲いたところで、話を終わりたいと思います。

### <質疑応答>

司会 どうもありがとうございました。

今回の長田さんの出された詩集をみますと、3.11の詩がいくつかありまして、詩「未来は

どこにあるか」ですか、そこには「3・11 神は  
みないかとも小さい」という釜石で被災した  
俳人の句も引かれてありますけれども、もうす  
ぐ丸 3 年が過ぎようとしておるんですけれど  
も、長田さんの感じておられる被災地の現状と  
いいますか、人々の思いといえますか、その辺  
はどんなふう感じていらっしゃるでしょうか、そ  
の辺からちょっとお話を伺いたいと思います。

**長田** わたしが行ったり、話を聞いたりする  
人にとって、一番支えになっているものは季節  
なんです。ね。

3 月 11 日に大震災が起きたことが、東北で  
すからまだ春は来ていないんですけれども、そ  
の後、春が来たなということが多くの人にとっ  
て非常に支えになったというか、なぐさめにな  
ったというか、励ましになったというか、それ  
は何度か聞きました。自分たちがこんなに悲し  
くても花が咲くというようなこともあり、それ  
で、人が入れないところでも植物は育っている  
わけですね。そういうのを見ると、そういうと  
ころで変わりなく季節が変わっていくことの  
美しさというか、そういうものによって人は、  
ただ花が咲いているだけのように見えるけれ  
ども、あるいはそれで散っていくようなことだ  
けれども、実際問題として、いろんな報道を見  
る限りでも、桜が咲いた、ヒマワリが咲いた、  
柿はどうした、野菜はどうしたというような話  
が人々の励みの中で一番生活の目安になって  
いる。もしそれがなかったら、みんな自分を支  
えることは非常に難しいのではないかと、とい  
うことを強く感じるようになりました。むしろ、  
季節感というのはごく当たり前のように思っ  
ているけれども、特にその後、ことしのように、  
まれにみる大雪の日が続いたり、去年の夏のよ  
うにものすごく暑い日が続いたりすると、われ  
われはそういうものにすごく動かされている  
というふうに思います。ね。

実際に、そのように考えてみると、近代の歴  
史の中でも、全部天気の比喻とか季節の比喻に  
よって語られている。「天気晴朗なれど波高し」  
とか、そういうようなものも考えてみると、季  
節の言葉で実に語られているんです。それで  
いながら、その季節をないがしろにしているん  
じゃないかというのが、正直、強く感じられる  
ようになりました。

## 詩集「奇跡」に託したもの

**司会** それから、私のほうからもう一つだけ。  
この詩集の題が「奇跡—ミラクル—」となっ  
ておまして、詩集の一番最後の題がその「奇跡」  
ということなんです。この「奇跡—ミラクル—」  
というふうに名付け、それに託しているもの  
は、長田さんとしてはどういうことなんです  
よいか。

**長田** 普通「奇跡」というのは例外として考  
えられて、そう語られるんですね。それで、特  
に「秘跡」というような形で宗教の言葉で語ら  
れるときには、全くあり得ないようなことが起  
きるといようなことになるんですけれども、  
そうではなくて、「ミラクル」というふうな副  
題をつけたというのは、当たり前で何でもなし、  
目に映っていないというふうに見えるものが  
一番われわれにとって大事な奇跡であるとい  
うことを思い知らされたのが今度の震災で  
はなかったかというふうに思うんですね。

一番大切なことはすぐ足元にある、あるいは  
すぐ目の前にあるということがなかなか気づ  
かれない。どこかで、いまでもその後ずーと  
語られているものは、ずーと近代の社会、特  
に明治以降の日本では、目標というものに向か  
って達せられるものとして考えられる。でも、  
そうではないというのは、いまみんながどこか  
で感じていることではないでしょうか。

今度のオリンピックで言うと、金メダルをと  
ったのではないと、銀メダルも銅メダルもメダル  
じゃないみたいな言われ方をして、メダルの色  
は違うけど、ということがしきりに言われるけ  
れども、それぞれのスポーツ選手たちの語って  
いるものは、それまでの努力とか、それをやっ  
てきた自分を支えてきた気持ちというものが  
一番大切なことであるということを繰り返し  
語っています。ね。

ところが、銀メダルになってしまったばかり  
に「ああ」とため息をつくのをみると、それ  
はないだろうというふうに思わざるを得ない  
ところが……。僕は、すばらしいことだと思  
います。ね。ああいうところで、オリンピックとい  
うのはいろんな作用もしますし、あそこにまだ  
国家というものが生きている。ちょうどオリ  
ンピックというものもまた近代の国家と一緒  
に生きてきて、今度のように、例えば韓国の選  
手が国籍を離脱して別の国から出て金メダル  
をとるといような、あくまでそういうような形



でしか行われていないときに、オリンピックもまた近代の産物なんだなど。これは、いわゆる郷土の誇りとか、自分たちのほうがずうっと大きいのに、というふうに思いましたね。

小さいときからジャンプなんかをやっている北海道の子どもなんかをみると、小学生たちがほんの1mぐらい飛ぶぐらいのところからそういう感覚というのを自分のものにしていくって非常にすごいことだと思うんです。それは日本の誇りとかなんとかじゃなくて、雪に育てられた誇りだろうと思うんですね。そういうことを大事にしたいというふうに感じますね。

**司会** ありがとうございます。

それでは、会場の方から、何かご意見とか質問とかがあれば、ご自由にどうぞ。きょうは、聞くところによりますと、長田さんの大学時代のクラスメートも参加されていらっしゃるそうですので、ご自由に、ご発言があれば、どうぞ。

**長田** 先の話の言い添えですが、最初にコピーを配っていただいた木下奎太郎の2つの詩というのは、現在手に入る岩波文庫版の木下奎太郎詩集（選詩集）には、どちらの詩も入っていません。これは全集でしか読むことができず、その全集もいまは絶版になっていますが、こういう詩も書かれていたということを思い出すべきではないかなというふうに思います。

### 感受性の畑を耕す詩人

**質問** いまの福島のお話とちょっと外れるんですが、詩人である長田さんに、ぜひ私がお聞きしたいことがあります。創造というのをいま勉強してしまして、芸術というのはまさに創造である、では、日本人はもっと創造豊かになるべきだなど。先ほどの美的景観もそうだと思いますけれども、その創造をどうやって実現していくのかというので、多分私たち経済を専門にしている人間から見ると、それは当然欲望だよ、個人の個体保存の欲求とか、氏族維持の欲求とか、社会的欲求とか。

ところが、東大の美学の先生に聞くと、「いや、そうじゃないと思う。そういうものがあるかもしれないけれども、芸術をやる人、特に詩人の場合には、お金をもうけるために詩をつくっているというわけではないよ。あんなもので売れるはずがないじゃないか。つまり、それは

あるイグジステンス（existence）存在というのを自分で感じるためにつくっているんだ」という話をきのうも議論していたんですけども、そのあたり、詩人として、詩をつくられるというのはどういうところが動機になっているんでしょうか、というのが第一点です。

そして、今回の福島の問題について、さらにそれについて、ああいう自然現象をみられたときに、それは新しい詩をつくるときに、どんな刺激というか、動機になっているとか、きっかけになっているんでしょうか、というのを、すみませんが、教えていただければと思います。

**長田** 最初のほうで言うと、昔から言われているのが正しいと思います。詩人というのはかすみを食って生きているものであって、金にはなりません。それで、何をしているかという、感受性の畑を耕すのが仕事で、それは、そういう意味で言うと、自分では言葉の農夫だと思っています。耕すことが重要で、耕すというのは、しかし、英語で言えばカルチャーですから、文化というものは耕すところにあるというふうに考えています。

それで、欲望によってつくるというのは自分を中心にした考え方になってしましますが、詩というのは人間の歴史と同じぐらい古いんです。それで、いまもそういう訳は定着しましたけれども、聖書の一番最初のところに、「初めに言葉があった」という言葉がある。ところが、それが明治時代の半ばに、それは残らなかったけれども、うまい訳をつけた人がいて、「初めに言霊があった」というふうに訳しておりますね。だから、言霊ですから、日本でも「言霊」という言葉は前から言われているんだけど、言葉というものは形があるものであると同時に、形のないものでもある。初めに形のないものがあって、その形のないものに形を与えていくのも言葉である。だから、両方を意味しているわけです、言葉ということが。そういうことを考えるんですね。

したがって、それは、例えば芸術とはどういうものかというときに、詩よりももっと誰でもわかるようなことと言うと、きっとごらんになったことがあると思います、ちょっと思い浮かべていただきたいんですが、例えばセザンヌの果物を描いた絵です。あれは何を描いたんでしょう。果物がそこにあるものをただ描いて、しかも、それが傑作になるというのはどうしてか。

それは何もその果物を食べるために描いたのでもなければ、その欲望で、これを所有したいということでも描いたのではなくて、ああいうような花瓶だとか、いろいろ果物などを描くのはどういう欲求によるかというときには、自分の心のさまを描くのではなくて、自分の前にある自分の生活をつくっている、あるいは人生をつくっている、そのものを描き取ると、どういものが自分の中に開けてくるかということじゃないかと思うんです。

わたしは、特に近代と呼ばれるときに、登場してきた静物画と言われるものが与えたものは大きいと思います。静物画というのは、英語で言えば、死んだものということなんです。死んだものを生かしていくのが、絵画のいろんな描き手の中からそれが生まれてきて、生きているものだけじゃなくて、そういうふうにして描かれてきた。

その絵の中には、絵ができるまでの間に、遠近法というのが生まれてくることによって絵画というのは力を得てくる。それは、自分がどういう遠近法を持って生きているかということよりも、相手を、対象を見て、対象の語っているものに耳を傾けて、目を凝らすことというのが芸術なんじゃないかというふう思うんですね。

芸術というのは、英語で言うと「アート(art)」ということになりますが、アートというのは「技」ということでもあります。芸術の芸というものもそうですが、術というのはわざです。いま、わざとしての芸術というものが、うっかりすると、表現としての芸術というのに強く押されてしまって、忘れられているんじゃないかという気がします。あるいは忘れがちになっているんじゃないか。

それは、自分たちを取り巻くいろんなものが変わっていく中で、そういうものがある。いまの経済で言うと、最近、わたしは割と好きなので、そういう番組をよく見るんですが、衛星放送、BS放送でイタリアの小さな村というのをやっているところで、自分の父親からオリーブ畑を譲り受けた、もういまは年寄りになった男の人、その人がどうして自分でオリーブ畑をいまもあれているのかといたら、オリーブ畑を耕して、その収穫を自分でしないと、1年1年というものがはっきり感じられない。それから、それをやっている、この畑をここにつくって残していった父親あるいは母親たちの生活というものを、その作業をしながらいつでも

思い出すことができる。金には全くならないんだけど、こうすることが自分というものを確かめる一番のいい方法なんだ、ということを書いていました。わたしは、そういうことがカルチャーなんだというふう思うんですね。

日本では、どうも習慣というものがいまあまり重んじられていないようで、生活習慣病なんていって、悪いほうのイメージばかりあるんですが、わたしはと、行き着くところは、その人を支えている習慣になるのではないかと、いうふう思う。われわれはその習慣というものを、むしろなかなか自分を支えるものとして考えにくくなっているくらい、周りがどんどん変わっていつてしまうというようなことがあります。

先ほど言われたところで言うと、わたしは福島市で生まれましたが、福島市というのは盆地の底の街なんです。ところが、いま新幹線で行くと、山の中をくぐっていきますから、出たところは盆地の底に出してしまうわけです。昔は、山のてっぺんにいて、ああ、あれが自分の町かと思ってガーッと一気におりていくという時間があったんですけども、いまはそれが無い。

これから名古屋との間にできる、わたしが死んだ後にできるのであろうリニア新幹線なんかでも、ほとんど山の中、土の中をくぐって、あつという間に行って、何がないかというふう思うと、そういう風景を支えているものは眺めなんじゃないかと思うんです。眺めというのは、ご存じのように、そのとおりの英語で言うと「ビュー(view)」ですね。「ビュー」というのは、インタビューからレビューから、いろんなものを含んでいるわけです。その眺めというのがいまないんじゃないか。

### 春風や闘志抱きて丘に立つ

福島市の場合は、真ん中に信夫山という山があるんですね。その端っこに盆地全体を見渡せるところがあるんですが、そのときに、いつも高浜虚子の俳句を思い出す。それはすごくいい俳句で、わたしは好きなんですが、「春風や闘志抱きて丘に立つ」というのです。「丘」という言葉が、わたしの子ども時代のポキャブラリーにはなかったんです。丘というのはどういうものだろうと思ったときに、あるときふっと、ああ、ここからこうやって遠くまで眺めているということが、その闘志の源であって、この立っているところが丘なんだというふうにする

とんと得心したんです。

丘ということが非常に重要なボキャブラリーになっているのはイタリアです。それも、北部イタリアなんかはそうなんですね。そのトリノという街に行ったときに、非常に山並みの格好が福島の山並みに似ているので驚きました。あ、これを丘というのか、それで、自分の育ったところは丘に囲まれてところだったんだ、というふうに思うようになりました。

そういう何か共通しているイメージというものが人を随分落ちつかせてくれるんじゃないかな、というふうにやっぱり思いますね。単語一つでも自分の中に入ってくるときに、どういうイメージを通して自分の中に入ってくるかということはとても重要なことじゃないかなと思います。

**質問** 長田さんの詩の大ファンでありまして、きょうは大変いいお話を聞いたなと思っていてんですけども、近代化の中で、国という概念、地方やふるさとということが消えて、いま国家としての国しか残っていないと。すでに国家としての国も、グローバル資本という言葉に置きかわっているんじゃないかというぐらい解体しているんですけども。

もう一つ、風景論の中でお伺いしたいんですけども、確かに復興ということを考えるときに、風景を、美しい風景、懐かしい風景をどうそこに思想として取り込んでいくのかという大変大きな提起だったと思うんですけども、同時に、現地では風景がなくなると同時にコミュニティが壊されて、それぞれの地の言葉も壊されていっているんですね。言葉そのものが震災によって壊されていく現状、そのことは日本人のメンタリティーにどう影響してくるのかということも含めて、少し言葉の問題をもう一度お聞きしたいと思います。

### 表現されていないものを語る

**長田** 言葉はすごく重要なものだと思いますが、言葉というものは全体的なものじゃないとわたしは考えています。言葉というのは世界の半分なんですね。

本を開いてみればすぐおわかりになると思いますが、こうやってみると、言葉のあるところと、白いところで言えば、白いところのほうが多い。でも、文字がなければ、これはただの白紙にすぎません。でも、文字があると、白紙

のところは余白になります。

それから、わたしはいま朗読しましたが、皆さんのお手元にあるのを見てもわかるように、言葉の中にあるのは、読点とか句点とか、そういったものは言葉で読むことができません。ですから、目で見ると、そこに句点があり、読点があるということはわかります。でも、朗読すると、これはあらわすことができないんですね。

したがって、言葉というものは、言葉で表現されているものが全てではない。表現されていないものがここにあるということを語るのも言葉だろうと思うんですね。

これは日本の特に伝統芸能なんていう古いもの、古い歴史を生きてきたものはよく知っていて、日本の伝統芸能なんかで一番重要なものというのは間合いです。その間合いというものが、何もなければ、せりふなら、せりふとせりふの間の間合いみたいなものがその人の、例えば役者さんたちの芸をつくっているということ。あるいは唄（はなし）家さんたちの芸をつくっているということ。その何でもないものを言葉によってはっきり意識させるのも言葉だというふうに考えるんですね。

ところが、いま現在、希望で全部を語るかのように、先ほどの首相の所信演説のように、「やればできる」と言い切れば、やればできるようになるというのは、やっぱりそうではない。やってもできないことがあるということが同時にくっついていないと言葉にはならないというのが大事なんですね。やってもできないかもしれないけれども、やってみようというのが一番わたしたちにとっての重要なところじゃないかと思うんです。

つまり、毎日の生活あるいはそれぞれの人の欲求というものは行きつ戻りつしていくんじゃないか。わたしはいつも、このごろはそういうものは全くなくなってしまいましたが、小さいときから、これは女の人には関係ないことですが、男のトイレに行くと「一歩前進二歩後退」という落書きがよく書いてありました。それで、この「一歩前進二歩後退」ということが非常に言い得て妙であると身にしみえていたんですね。「一歩前進二歩後退」というそのバランスが社会のマナーなんだというふうに、そういうところに生きているようなところで行きつ戻りつしながら少しずつ、それでも進んでいくというか、やっているところがわたしたちの日々のあり方なんじゃないかなというふうに

思いたいというところがあります。

自分で考える場合でも、一番小さいときから嫌ってきたのは「二者択一」という考え方でした。ですから、物事をどっちかを選ぶ、いいか悪いかを選ぶというのではなくて、いいことの中にも悪いことがあり、悪いことの中にもいいことがある、そういう中であんばいを測りながら動いていく言葉があって、ちょうど料理などで言うと、いま言った「あんばい(塩梅、按配)」という言葉が非常に大きな意味を持っているんですね。

いま、例えば政治を語る言葉、経済を語る言葉、あるいはその他の言葉の中で一番見落とされているのは、「いいあんばいに生きる」というところがないんじゃないでしょうか。「あんばい」は正確に計測は不可能なんですけれども、確かにそれで「ここらだ」と感じる一点がある。はっきりしないけれども、はっきりわかっている感覚というものがある、そういうものがわたしたちを生かしているということを考えるべきではないか、ということを考えるんですね。

言葉で全部言い切って、強気に言ってしまうと、それが非常に強気な表現になるというふうに考えがちですが、強い言葉を語る時は、大体もろいんです。もろい言葉を語るのは、大体強いんです。

わたしも病気をしたのでわかりますけれども、「ああ、おれはもうだめかもしれない」と

というような言葉を言うときには、大概の人は、これにくたばってたまるか、と思っているときにそう言う。自分が絶対的にいいときには、「もうだめかもしれない」と言いたくなる。人間というのは、そういう逆説を持っているところが圧倒的に人間の存在を形づくっているもので、いま逆説というものがどうかすると失われつつというか、見落とされつつあるんじゃないかなという気がどこかでしています。

そういうことでよろしいでしょうか。

**司会** お約束の時間になりましたので、きょうのお話し会はこの程度で締めたいと思います。長田さんにはこの詩集の題名、「奇跡—ミラクル—」という揮毫をしていただきました。

当クラブから、長田さん、ふだんはあまりネクタイをしないそうですが、ネクタイのプレゼントを先ほどしておきました。

本日はどうも楽しい時間をありがとうございました。

**長田** ありがとうございました。(拍手)

(会見詳録を修正、加筆したものです・編集部)